26　「式部日記」和泉式部 ─中古の日記

20年度　日本大学

★　次の問題文は『和泉式部日記』の一節である。これを読み、後の問いに答えよ。

＊　（以下「宮」と略称）は、女（和泉式部）に会うために外出の準備をしていたところ、から軽々しい夜歩きを厳しくめられてしまった。宮と女との仲がすでにになっていること、女の家には多くの男たちが出入りしていることを聞かされた宮は、しばらく自重せざるを得なかった。ようやく女のもとを訪れた宮は、女を他所に連れ出そうとする。

　からうじておはしまして、「アあさましく心よりほかにおぼつかなくなりぬるを、おろかになおぼしそ。まちとなむ思ふ。り来ること便悪しと思ふ人々、あまたあるやうに聞けば、いとほしくなむ。おほかたもつつましきうちに、いとどほどへぬる」とイまめやかに御物語したまひて、「いざたまへ、今宵ばかり。人も見１ぬ所あり。心のどかにものなどもａ聞こえむ」とて車をさし寄せて、ただ乗せに乗せたまへば、われにもあらで乗りぬ。ウ人もこそ聞けと思ふ思ふ行けば、いたう夜ふけ２にければ、知る人もなし。　　Ａ　　人もなきし寄せて、りさせたまひぬ。月もいとければ、「下り３ね」としひてのたまへば、エあさましきやうにて下りぬ。「さりや。人もなき所ぞかし。今よりはかやうにてをｂ聞こえむ。人などのある折にやと思へば、つつましう」など物語あはれにしたまひて、明けぬれば、車寄せて乗せたまひて、「御送りにも参るべけれど、明くなり４ぬべければ、オほかにありと人の見むもあいなくなむ」とて、とどまらせたまひぬ。

　女、道すがら、「あやしの歩きや。人いかに思はむ」と思ふ。あけぼのの御姿の、カなべてならず見えつるも、思ひ出でられて、

　　「キ宵ごとに帰しはすともいかでなほあかつき起きを君にせさせじ

苦しかりけり」とあれば、

　　「ク朝露のおくる思ひにくらぶればただに帰らむ宵はまされり

さらにかかることは聞かじ。さりはがりたり。御迎へに参らむ」とあり。あな見苦し、つねにはと思へども、例の車にておはしたり。さし寄せて、「はや、はや」とあれば、さも見苦しきわざかなと思ふ思ふ、ゐざり出でて乗りぬれば、の所にて物語したまふ。

注１　御あやまちとなむ思ふ―「あなたに非があると思います」という意味。

注２　かく参り来ることしと思ふ人々―「こうして私がお訪ねすることを不都合だと思っている男たち」という意味。

注３　―建物と建物とを結ぶ渡り廊下。部屋が設けられている場合もあった。

注４　ふたがり―方角が悪いということ。その上で「へ」をする必要があること。

問１　波線部１～４の助動詞のうち、他と種類が異なるものはどれか。次の①～④から一つ選べ。

　　①　１　　②　２　　③　３　　④　４

問２　二重傍線部ａ・ｂの「聞こえ」は、誰から誰への敬意を表しているか。最も適切なものを次の①～④から一つ選べ。

①　ａ・ｂともに女から宮への敬意を表している。

②　ａ・ｂともに宮から女への敬意を表している。

③　ａは宮から女へ、ｂは女から宮への敬意を表している。

④　ａは女から宮へ、ｂは宮から女への敬意を表している。

問３　空白部　Ａ　には状態を表す副詞が入る。文脈上最も適切なものを次の①～④から一つ選べ。

　　①　いみじく　　②　げに　　③　なかなか　　④　やをら

問４　傍線部ア・イ・ウ・カの意味として最も適切なものを、次の①～④からそれぞれ一つずつ選べ。

ア　「あさましく心よりほかにおぼつかなくなりぬるを、おろかになおぼしそ」

①　我ながら不思議なほど心が乱れて気がかりな状態でしたが、あなたのことを愚かだと思い続けることはできません

②　我ながらあきれるほど思いがけず足が遠のいてしまいましたが、あなたのことを冷淡だと思い続けることはできません

③　我ながら不思議なほど心が乱れて気がかりな状態でしたが、私のことを愚かだとお思いにならないでください

④　我ながらあきれるほど思いがけず足が遠のいてしまいましたが、私のことを冷淡だとお思いにならないでください

　イ　「まめやかに御物語したまひて」

①　真剣に物語をお読みになって

②　誠実な様子でお話しなさって

③　悲しそうな様子でお話しなさって

④　くどくどとお話しなさって

　ウ　「人もこそ聞け」

①　人にこそ聞いてもらいたい

②　人の言うことも聞きなさい

③　人が聞きつけたらいけない

④　人までも聞きつけてしまう

　カ　「なべてならず見えつるも、思ひ出でられて」

①　たいそう不審な様子に見えたことも、自然と思い出されて

②　たいそう不審な様子に見えたことも、お思い出しになって

③　格別に美しく見えたことも、自然と思い出されて

④　格別に美しく見えたことも、お思い出しになって

問５　傍線部エ「あさましきやうにて」とあるが、なぜ「あさまし」と感じたのか。その理由として最も適切なものを次の①～④から一つ選べ。

①　いきなり連れ出されたばかりでなく、月明かりの中で宮から下車を迫られ、自分の姿が丸見えになってしまうと思ったから。

②　いきなり連れ出されたばかりでなく、月明かりの中で宮から下車を迫られ、宮の容姿がはっきりと見えてしまったから。

③　いきなり連れ出されたばかりでなく、のない暗闇で宮から下車を迫られ、恐ろしさのあまり身動きができなかったから。

④　いきなり連れ出されたばかりでなく、人気のない暗闇で宮から下車を迫られ、自力で下りなければならないと思ったから。

問６　傍線部オ「ほかにありと人の見む」とは、どのような事情を述べたものか。最も適切なものを次の①～④から一つ選べ。

①　女が宮に、送りに出ているうちに夜が明けてしまったら、二人でいるところを通行人に目撃されるだろうと述べている。

②　女が宮に、送りに出ているうちに夜が明けてしまったら、どこかに外泊してきたと宮家の人々が誤解するだろうと述べている。

③　宮が女に、送りに出ているうちに夜が明けてしまったら、二人でいるところを通行人に目撃されるだろうと述べている。

④　宮が女に、送りに出ているうちに夜が明けてしまったら、どこかに外泊してきたと家の者が誤解するだろうと述べている。

◎問７　傍線部キ「宵ごとに…」の和歌の説明として最も適切なものを、次の①～④から一つ選べ。

①　女の歌で、毎晩宮が訪れても会わずに追い返すという決意がこめられている。

②　女の歌で、このような外泊は今回限りにしたいと遠回しに断っている。

③　宮の歌で、毎晩追い返されても女をあきらめないという決意がこめられている。

④　宮の歌で、このような訪問は今回限りにしたいと別れを匂わせている。

◎問８　傍線部ク「朝露の…」の和歌の説明として最も適切なものを、次の①～④から一つ選べ。

①　女の歌で、会わずに帰る夜のほうがつらいと、関係の継続を求めている。

②　女の歌で、会わずに帰る夜のほうが平和だと、宮の求めを拒絶している。

③　宮の歌で、会わずに帰る夜のほうがつらいと、さらなる外泊を求めている。

④　宮の歌で、会わずに帰る夜のほうがまだましだと、女の薄情さを嘆いている。

問９　問題文の内容に最も合致するものを、次の①～④から一つ選べ。

①　宮は、方角が悪いことを口実に、翌日の晩も女を強引に連れ出し、昨日と同じ場所で一夜を過ごした。

②　人目を気にせず、自ら車に乗り込んでくる女の軽率な振る舞いに、宮はすっかりあきれ果ててしまった。

③　家まで送ってくれなかった宮の冷淡さを恨んだ女は、宮からの手紙が届く前に、和歌を贈って抗議した。

④　男性関係の話題を何度も蒸し返す宮に対して、女は幻滅を感じ、宮との密会はもう止めようと決意した。

問10　和泉式部の説明として最も適切なものを、次の①～④から一つ選べ。

①　『万葉集』を代表する女流歌人であり、天皇の愛を受け、情熱的な恋の歌を多く残した。

②　六歌仙の一人に数えられ、『古今和歌集』以下の勅集に多くの歌を残した才色兼備の歌人である。

③　一条天皇の中宮である定子に仕え、宮仕えの経験や自然・人事に対する感想を記した随筆文学が有名である。

④　一条天皇の中宮である彰子に仕えたことがあり、同じく彰子の女房であった紫式部と面識があった。

【解答】

問１　①

問２　②

問３　④

問４　ア＝④　イ＝②　ウ＝③　カ＝③

問５　①

問６　④

問７　②

問８　③

問９　①

問10　④

【現代語訳】

　やっとのことで（宮は女のもとへ）いらっしゃって、「（我ながら）あきれるほど思いがけず（あなたのことが）気がかりになるほどに足が遠のいてしまったが、（私のことを）冷淡だとお思いにならないでください。（あなたの）ご責任だと思います。こうして（私が）お訪ねすることを不都合だと思う男たちが、大勢いるように聞くので、（私が訪問してあなたが迷惑するかと思うと）気の毒に（思ったのです）。総じて遠慮しているうちに、いっそう時が経ってしまった」と誠実な様子でお話しなさって、「さあいらっしゃい、今夜だけは（一緒に過ごしましょう）。（どんな）人も見ていない所がある。心静かにお話なども申し上げよう」と（宮は）言って車をさし寄せて、お乗せになったので、（女は）我を忘れて乗った。人が聞きつけたらいけないと（女は）思いつつ行くと、たいそう夜が更けてしまったので、気づく人もいない。そっと人もいない渡り廊下に（車を）さし寄せて、（宮は）お下りになった。月もたいそう明るいので、「下りなさい」と（宮が）無理におっしゃるので、（女は姿が見えるではないかと）あきれた様子で下りた。「そんなこと（＝姿が見えること）があるか。人もいない所だよ。今からはこのようにして（お話を）申し上げよう。（あなたの家では）他の人などがいるときであろうかと思うと、遠慮するように（思われます）」などとお話を感慨深くしなさって、夜が明けてきたところ、車を寄せて乗せなさって、「（家まで）お送りに参りますのが当然ですが、明るくなりそうなので、外泊していたと（私の）家の者が思うようなこともつまらないと（思いますので、控えておきます）」と言って、（そこに）とどまりなさった。

　女は、（帰りの）道中で、「あきれた外出だなあ。家の者がどう思うだろうか」と思う。夜明けの頃の（宮の）お姿が、格別に美しく見えたことも、自然と思い出されて、

　「宵ごとに帰しはするとしても、どうしてもやはり暁に起きて帰ることをあなたにさせたくはない（暁に起きて帰るのは初めてだが）、

つらいものだなあ」と書き送ると、

　「朝露が『置く』ように、暁に（帰らねばならず）『起きる』ときの思いに比べると、会わずに帰るような宵はもっとつらい（だから逢いたい）。

まったくこのようなこと（＝あなたの申し出）は聞き入れるつもりはない。（次の）夜は方角が悪くなっている。（方違えをする必要があるので、そのときに）お迎えに参りましょう」と（宮も）書き送る。（女は）ああ見苦しい、いつもいつもは（逢うことはしまい）とは思うが、（宮は）いつものように車でいらっしゃった。（宮は）車をさし寄せて、「早く、早く」と言うので、（女は）まったく見苦しい行為だなあと思いつつ、して出て乗ったところ、（宮は）昨夜の所でお話をしなさる。